

保坂弘司著

大鏡新考

総論・索引篇

學燈社

著者略歴

1906年 新潟県に生まる

1930年 早稲田大学文学部国文科卒業

現在 昭和女子大学教授 日本大学文理学部講師

主要編著

『日本文学の新系譜』（久松潜一監修，1943年，旺文社）

『国文学総説』（藤村作監修，所収論文「樋口一葉」1952年，学燈社）

『源氏物語詳解，その語法と評釈』二卷（1959年，学燈社）

『新抄日本文学』（吉田精一共編・1966年，学燈社）

現住所

東京都世田谷区松原 4-14-19 (〒156)

大鏡新考 総論・索引篇

昭和四十九年七月十五日印刷
昭和四十九年七月三十一日発行

定価 五〇〇〇円

著者 保坂弘司

発行者 石井時司
東京都新宿区戸塚町一ノ四二〇

印刷所 大盛印刷株式会社

発行所 株式会社学燈社

東京都新宿区戸塚町一四一〇
電話 東京 (〇三) 二〇二四六三二
振替口座 東京 三六二五三

序

序

久松潜一

保坂弘司氏の『大鏡新考』が、三巻の大著として完成され、世に出ることになったのは学問的にも意義が大きい。『大鏡』は日本文学史上に重要な位置を占めている。近世にも大石千引の『大鏡短観抄』があるが、近代になってこの作品の価値は一層高くなり、学校の古典教材としても『大鏡』は多く用いられている。同じ歴史物語の中で『増鏡』は流麗な『源氏物語』の文体の流れをくんでいるに對して、『大鏡』は力強く線の太い文体である。大宅世継や夏山繁樹や若侍の問答もあざやかであり、扱われている道長その他の人物も躍動している。ただこのようにすぐれた作品であるが、すぐれた註釈もしくは評釈は比較的少い。

私はかつて国文学の学生であった頃、芳賀矢一先生の歴史物語の講義を聴講した。『大鏡』や『増鏡』などを歴史物語と名づけられたのは多分芳賀先生であると思うが、先生は『大鏡』が大宅世継や夏山繁樹らの問答の形をもって書かれたのは仏典の影響ではないかと説かれた。先生が世を去られた後に、遺稿が出ることになり、歴史物語もその中に加えられた。それでかつて聴講した時のノートにもとづいて清書した。そのようなことから『大鏡』をはじめ歴史物語に関心を有していたので、後に『大鏡』と『増鏡』との抄本を編したこともあり、旧制高校では『大鏡』の講演を幾度となく行った。それでその文章や構想のすぐれたことをも一段と感じた。『大鏡』と『増鏡』との比較、『大鏡』とほぼ同じ時代や人物を扱った『栄花物語』との相違を考えるとともに、『大鏡』が『源氏物語』や『枕草子』

などを理解する上にも重要な意義を有することも感じた。『大鏡』は歴史であるとともに文学でもあるが、王朝文学の背景を知る上にも離せないのである。

保坂氏は極めて篤学の士である。先きに世に出された『源氏物語詳解・その語法と評釈』（二巻）もすぐれた成果であったが、『大鏡』に至っては、その精魂を傾けて詳細な評釈を書きあげ、更にその研究をも完成された。作者と成立年代を考察し、構成を論じられるとともに、構想の基底とその文芸性を明らかにし、更に『大鏡』に於ける批判性の特徴や語法の位相を扱っている。『大鏡』の研究として組織的であり創見も多く、これまでの『大鏡』研究を数歩前進せしめている。

保坂氏のこの書のなったことを喜ばしく思うあまり、本書の序を書くにはふさわしくないと知りながら、すすめられるままに感想をのべて序に代えるのである。

序

山 岸 徳 平

本書の著者は、歴史物語、就中、『大鏡』に深い関心を抱き、その研究に従事して既に二十年に及ぼんとする。勤めたりと言うべしである。然し著者は、その間、論語に言わゆる「人の己を知らざるを患へず人を知らざるを患ふ」の謙虚な学究的態度で精進を続けて倦まず、ここに国文学として、また、歴史としての『大鏡新考』三冊の高著が完了した。

その三巻の構成は、第一巻は総論・索引篇、第二巻・第三巻は、総釈・論考篇上下であり、『大鏡』の成立や構想及び文学的、国語学的研究から、題名・諸本・裏書など、書誌学的検討が、漏らさず実施せられた。総釈・論考篇では、紀伝体の歴史の本紀に当る部分は、文徳帝以下後一条院まで、列伝に当る部分は、冬嗣以下道長に及び、道長は特に詳細に扱われた。その後「皇后宮の大夫殿の書き継ぎの夢」の論がある。もともと、『大鏡』は「翁らが説く事は、日本紀を聞くと思すばかりぞかし」と翁が述べた如く、創作的目的は歴史としてであった。それに対してこの著者は、研究史的に、従来の研究や論考を綿密に批判し、自説の確立に努力を払った。その跡は顕著なのである。

さて、この『大鏡』をば、国文学の対象として鑑賞するとしても、歴史的文献として討究するとしても、それはすべて言語・文字によって表現せられているから、その言語・文字の解釈が、出発点となる。先ず国文学的作品としての解釈には、特に表現面の論理的解釈のため、文法学と意義学との、精密な操作を期さねばならない。同時に表現層

の心理的解釈には、社会史・文化史・思想史・宗教史・芸術史・経済史等々の広汎な分野の研究とか、認識・体験・見聞を必要とする。すべてそれらの操作や理解が弱小では、完全な解釈も決して出来ないものである。著者は、その点を強調して、「本居宣長への回帰」を目ざすと明言したのを、私は欽仰の至りに思うのである。また、歴史的史料として使用するとしては、それを言語・文字による伝承手段とするだけではなく、その史料の背景たる、歴史的事実の詳細な智識が重要であり、更に、前にも述べた如く種々の補助学科の智識も緊要なのであった。かくして、歴史物語、広くしては歴史の研究家は、史料を通して、自ら深く思索すべきものであると思う。故に、以上の如き各方面の検討が不十分では、解釈の問題も、評価の問題も分析の問題も、到底不可能なのであらう。この著者は、それらの点にも、独自の識見を遺憾なく展開しているのであった。

要するに、本書は、「この著者の言わばライフワークとも称すべき研究と調査である」かと思う高著である。その点を強調しつつ、進んで私は本書を推奨するものである。

最後に、この著者は、三段飛びの選手として、織田幹雄君などと同じ頃、陸上競技界に活躍した人であったことを附記する。私は、全日本陸連の審判部長の時代もあったので、瞑目すれば、若かったこの著者の颯爽たりし長身の跳躍姿が今でも髣髴と眼中に浮ぶのである。

序

岡 一 男

知友保坂弘司教授が十九年ものあいだ、全力投球で長い学的労作をつづけて来られた辛苦の結晶として、ライフ・ワーク『大鏡新考』全三巻が、『大鏡』研究史上量質双絶の空前の名著としてここに完成したことは、故五十嵐力博士の同門の旧誼からだけでない、学界全体の近來の壮挙として、心からおよろこび申しあげたいと思う。

というのは、『大鏡』の近代的名著は佐藤球翁の『大鏡詳解』で、震災後乙丑^{大正14年}の五月、華甲をむかえられての記念の大作であるが、昭和二年二月上梓いらい、現在にいたるまで私の机辺からはなせない恩顧の書となっている。また

戦後に刊行された鴻著は、秋葉安太郎博士の『大鏡の研究』二巻^{上巻本文昭和36年、下巻語法篇35年刊}である。本文編は学界が東松本一辺倒

の時代に、同系統の近衛家旧蔵の三巻本^{本京大}を底本とし、東松本、それより古態を存する千葉本^{本天理}、桂宮本^{本御所}、

平松本^{本京大}を厳密に比較し、『大鏡』の語法研究の基礎資料とすることを目的として作製された「校本大鏡」と、本文の系統および伝本についての精細な書誌と、語句索引・和歌引歌漢詩索引・実名音引人名索引からなっており、そ

れが下巻の語法篇の地をなしている。それは著者の恩師山田孝雄博士の画期的な偉業^{国語史料、鎌倉時代之部}「平家物語につきての

研究」の前篇「平家物語考」、後篇「平家物語の語法」二冊を襲承・瀉瓶して、山田博士の『平安朝文法史』が中古の語法にとどまるを憾みとして、院政時代の国語史料としてその欠を補なおうとしたものである。しかし、その深義は小久保崇明氏の『大鏡の語法の研究』^{昭和42年刊}によって、つぶさにあきらかにされたから、ここには贅しない。それは秋

葉博士自身「この荒野に開拓の一鍬を入れたやうな程度に過ぎず」と謙遜されているが、『大鏡』に一鍬入れることによって、それが未開拓の曠野につづいていることを発見されたのは偉大な先覚者の風がある。

我々が五十嵐力博士の『大鏡』の講義を伺ったときは、坪内博士のシェークスピアのお講義をほうふつさせられたが、近頃の大衆歴史文学や「日本史探訪」をテレビで見る気持がする。『大鏡』の魅力はそこにあり、『今昔物語集』の説話などは、原作の筋書みたいなもので、説話があのままでは生動していない感じがする。

このことは保坂教授がよく知っておられ、先学の成立論・作品論の全業績をふまえ、広く古今の諸注をふまえ、文芸科学的な見地から斬新な論究・評釈を加え、原作者のプロットに迫った大著をなされたことは、繰り返しているが、保坂教授や我々だけのよろこびだけでなく、学界の慶事で、ここから新しい『大鏡』研究のスタートがはじまると思う。

序

松 村 博 司

私が始めて東松本『大鏡』を拝見したのは、昭和三十一、二年の頃ではなかったかと思う。いま明治村に移された東松家が、まだ大船町にあった頃お訪ねしたのであったが、幸いその頃、桑名の諸戸家でお茶の会があり、その時発見者の田山方南氏もお出でになるということで、そのお茶会の席上に陳列された六巻の卷子本を、心ゆくまで堪能したことであった。私は、この東松本を底本に選んで、「日本古典文学大系本」の校訂注釈の仕事を進めたのであったが、その時多くの助力を太田晶二郎氏にいただいた。この仕事は、日時の切迫などの事もあって、大へん急いだので隅々まで配慮を及ぼすことができなかった事は、残念な気がする。いま、當時を回顧するに、東松本などの、いわゆる古本系を底本として、これに注釈を施したものは皆無であった。すべての注釈書は、増補本系の、いわゆる流布本系を基としており、細部の語形などには、かなり不純な要素も多く、その目で東松本を見る時、解釈に困難を覚える節もすくなくなかった。当時は、橘純一氏の『大鏡新講』が良心的で權威あるものとされており、私もすくなくからぬ恩恵をいただいたが、遺憾ながら、この書も流布本系を底本にしている。

その後、『大鏡』の研究・注釈は急速な進展を見せ、まったく隔世の感がある。

今度の保坂弘司氏の『大鏡新考』は、全三巻総頁一六〇〇頁を超える、畢生の大著である。その論考は、雑誌「学苑」等に連載され、私もその都度恵受を受けて、その斬新な論立てに目をみはったものである。また、注釈は、多年

「國文學」に連載されたものに、新たに補訂の手を加えられたもので、本文は、東松本系を根幹として、随時増補本系を参照して、詳注を加えられたものである。その注釈は、広く諸注を参考しているが、一步を進めて、著者の見解をもって断を下されたものが多く、そのあたりに著者の自信を窺い知ることができる。文法に詳しいことは一特色といつてよく、これもまた著者の得意とするところである。また、各節の終りに、考究と批評を加えて、文脈の背景を明らかにされたことは、既往の注釈書に絶えてなかったことであり、教えられることが多い。

著者の見解によれば、『大鏡』の著作年代は院政期になるものであり、大体内容から言ってもそれは穩当な説であらうが、私は、成るべくその成立年代を引き上げようと考えているものである。東松本は現存最古の完本ではあるが、その書写年代は鎌倉時代中期であり、しかも卷五・六はその親本が取合せ本らしく、『大鏡』原形の成立にはなお問題があろう。しかしながら、このような考え方は、妄想であり、白昼夢にも終りかねないものであり、現時点における最高の論考・注釈としては、この『大鏡新考』をもってしなければならない。私も改めて本書について『大鏡』を勉強し直してゆくつもりである。

自序

自序

ここに、「日暮れて途遠し」の感を深くしながら、学究の一里塚を築く。昭和三十一年に『大鏡』を、本腰を入れて読みはじめてから、十九年の星霜を経た。その読みの中から、拙い解釈と論考が生まれ、その上に私なりの作者論・成立論・構想論・構成論・語法論などの総論が打ち樹てられた。三十五年間を費して成ったという本居宣長の『古事記伝』には遠く及ばないが、それでも、遙かな山河を越えて来たという実感が私にある。

私の場合、逆説めいた言い方になるが、総論は岩間をつたう苔水のように、かすかないとなみが積み重ねられて、すんなりと生まれてきた。墮地獄の苦しみを苦しんだのは解釈であった。『大鏡』の原文の前に正座するとき、恐ろしい言葉が聞こえて来た。「われわれの言おうとすることが何であろうと、それを表現するためには、ただ一つの言葉しかない」という、フローベルが弟子のモーパッサンに教えた言葉だ。私を襲い続けたのは、はたして、この文のこの語句に、作者が与えたただ一つの意味を、正しく捉え得たかどうかという底知れない不安感である。それからまた、「書くとは、分析する事でも判断する事でもない。言わば、言葉という球を正確に打とうとバットを振る事だ」という小林秀雄の言葉だ。ジャスト・ミートしたその言葉をキャッチしているだろうかという測々たる懸念である。おおげさに聞こえるかも知れないが、私の六畳の書斎の資料群は、この十九年間、ついに開けっぱなしであった。

世の純粹な学徒とちがって、いろいろな業なりわいを持つてゐる私は、零細な時間をやりくりして飛び込んだ書齋で、すぐに学究の営みにはいらなければならなかったからである。資料群の開けっぱなし、——不潔極まる話だが、幸いに、電気掃除器という便利なものがあつて、書物の谷間の塵埃を吸ってくれるので、どうやら無精な学究生活もなんとか続けることができた。

ところで、十九年といったが、この間一途に、順序正しくこの物語を追いかけていたわけではない。じつを言えば、私の『大鏡』への入門は、かなり氣紛れなものである。昭和三十一年四月のある日、『大鏡』を読んでいて、藤原道長の息子の顕信のショッキングな出家事件に、いたく感慨を催したのである。そして、文学と歴史とのかかわりあい、異様なまでに心打たれ、平安の歴史を覗いてみようという氣になったのである。しかし、その背景には、恩師五十嵐力先生がいた。当時あの、裏に雑木林があつて、蚊が脛を刺す薄汚い早稲田大学の文学部の教室で、『大鏡』のおかしさと眞実とを諄々と説いたのは、先生だったが、なにげなく聞いていたあの講義が、じつは私の心に火をつけたのだ、とはつきり言える。いや、私はもう一つの事実を、ここではつきり言っておかなければならない。私はいまも『源氏物語』探求への執念を燃やし続けている。ところで、極めて自明なことではあるが、源氏探求には、藤原時代を追求しなければならない。さいわいなことに、『大鏡』の研究は、その欲求を充たしてくれるだろう、といったふくつけき希いがあつた。ところが、『大鏡』を追いかけているうち、これは、いろいろな意味で、『源氏物語』と女性対男性という関係で対比する、すぐれた作品である、ということに氣がついたのである。私は、いずれその対比性について書かなければならないであろう。そして、この価値観が、私に油をそそいだのである。

昭和三十六年七月に、『國文學』誌上に、一応の連載を終えた私は、折しも松村博司氏の『日本古典文学大系・大